事例 11　　単元「器械運動」

鉄棒を使った運動の実践

体育　第４学年
かほく市立宇ノ気小学校・教諭

１　事例の概要

河北郡市の４年生は、６月に行われた器械運動交歓会に向けて、体育の時間を中心に放課後も学年で練習を行ってきた。低学年から交歓会があることを意識し、器械運動に親しむ機会をたくさん作っている。自分の担当する２年生から５年生の中で各学年１クラスずつ事前アンケートを行ってみたところ、全ての学年において全員が体育の時間を好きと答えた。ところが鉄棒を好きと答えたのは６割程度であった。鉄棒を好きになるためには、楽しいという体験やできたという達成感を持たせることが必要不可欠であると考えた。そこで①練習教材の工夫、②補強運動の工夫、③めあてをも持たせる工夫、④関わり合いの工夫の４点を重点に授業に取り組んだ。

Ａ―１　事例の概要

２　実践内容

(1)　単元の目標

・器械、器具の安全に気をつけながら、友だちと協力し、教え合い励まし合って運動することができる。　（運動や健康・安全への関する関心・意欲・態度）

・課題を設定し、課題解決に向けて練習を工夫することができる。
（運動や健康・安全についての思考・判断）

・自己の能力に適した技に新たに取り組み、ある程度正確にできるようにするとともに、上がり技、支持回転技、下り技を組み合わせることができる。　（運動の技能）

(2)　指導上の工夫点

① 練習教材の工夫

補助具を活用してできたときも「できた」と認め、スモールステップで技ができるようになるプロセスに、喜びを感じられるようにしていきたいと考えた。逆上がり練習器、跳箱と踏切板、ポートボール台、ゴムひもなどの補助具を活用した。また、痛さに対する嫌悪感・恐怖心が意欲の減退にもつながると考え、落下をしたときに痛みを和らげるために、鉄棒の下にはマットを敷き詰めた。テーピングの巻き方を工夫したり、サポーターの代わりに靴下を切って使用し、痛みを和らげた。滑り止めは粉が飛び散らないように靴下の中に入れた。

② 補強運動の工夫

マット・鉄棒・跳び箱を同時に取り組んだため、補強運動は３つの単元で共通に行えるものと、各種目、各時間によって取り入れたものとがある。ＡＢＣの３つのグループに分かれ、サーキット形式で行った。回数はわかりやすく１０回または１０秒とした。

③ めあてを持たせる工夫

技の名前や動き・ポイントがわかるように、鉄棒に一番近い壁に、上がり技、回り技、下り技のポイントを図と言葉で紹介したパネルを掲示しておいた。学習カードは運動量を十分確保できるように、できるだけシンプルにした。表は技能について自己評価と相互評価ができるようにした。裏には振り返りができるようにした。

④ 関わり合いの工夫

補助をしたり、補助具を押さえたり、お互いに技を見せ合い、良かったところやできていないところをアドバイスし合うようにした。教師もできたことを一緒に喜んだり、わずかな進

歩に対しても賞賛をし、学習意欲を持続させた。技のポイントをリズム言葉やイメージをつかませる言葉などわかりやすい言葉で助言をした。

Ｂ―１　指導法の工夫

３　指導の実際

次	学習活動（７時間）	関心・意欲・態度	思考・判断	技能
一（1）	オリエンテーション ・学習のねらいと進め方を知る。 ・学習カードの使い方を知る。 ・補強運動をする。技を知る。	①鉄棒運動に興味・関心を持ち、すすんで取り組もうとする。		
二（2）	―知る段階― 【ねらい１】 今できる技をくり返したり、組み合わせたりして楽しむことができる。 ・　どんな技ができるのか試す。 ・　自分のできる技がさらに上達するように練習する。		②自己の能力を知り、学習カードから自分の課題を見つけている。	
				③今できる技をくり返したり、組み合わせたりすることができる。

Ｃ―１　指導案（単元計画・評価規準）

４　成果と課題

(1)　成果

補強運動を継続して行ったことで、腕支持の感覚や逆さ感覚が身に付いたと感じた。また、段階を追って技を練習したことで、「できた」という達成感は味わえたと思われる。単元終了時には新たに、逆上がりは６名、踏み越し下りでは１０名ができるようになり、逆上がりはクラスの６割以上、踏み越し下りでは８割以上が技を完成させた。技の紹介パネルや学習カードから技の名前を覚えたり、ポイントを見て練習することができた。友だちと見せ合うことで、できない技でも友だちからヒントをもらい、アドバイスや補助を積極的に行っていた。できたことを一緒に喜ぶ雰囲気がクラスに広まり、クラス全体が高まっていく様子が見られた。

(2)　課題

補強運動については、児童が意欲を持って継続して取り組み力を付けていけるよう、ゲーム要素を取り入れるなどさらなる工夫が必要である。場づくりには時間がかかり、補助具をおいた鉄棒が種目を限定してしまう。いろいろな段階の子どもがいるが、準備ができる補助具の数が決まっているという課題も見つかった。友だちとの関わりを苦手とする子どももいるので、ペアやチームを作るときには配慮が必要だと感じた。さらに、評価は１時間に１評価を設定することで１時間の指導を焦点化してきた。しかし、逆上がりを中心に補助に時間を要して、評価が難しかった。支援と評価のあり方についても工夫が必要だと感じた。

Ｄ－１　アンケート結果

５　その他

参考図書「小学校体育図解・実践④器械運動」東洋館出版社　　「新評価基準表」図書文化